

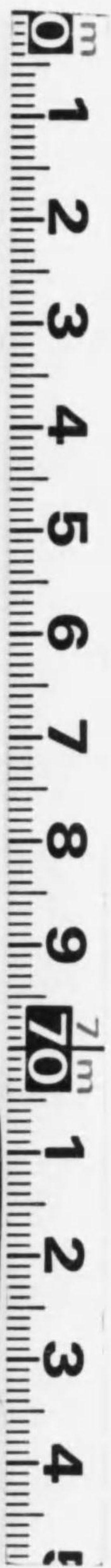
蜀山狂歌撰集

遺訓叢書
普及版

特249

763

定價貳拾錢



始



特249
763



蜀
山
人
遺
詠
集



蜀山人遺詠集

春のはじめに

くれ竹のよの人なみに松たてゝ破れ障子をはるはきにけり

年内立春

年の内にひきとり置いて婚禮はおつてのことの春の佐保姫

立春山

須彌山も五岳も不二もひとときにとつとゝ笑ふはるは來にけり

小娘の羽根つくをみて

羽子のこの一こにふたご見渡せば嫁御にいつかならん娘子

早春

萬歳のつゞみにつれて鶯もほうと初音やうち出すらん
子日

春の野になべとり公家の立いで、ひくや子日の松の牛房根
子日する野べに小松の大臣はいまも賢者のためしにぞひく
鶯

かくの如く我聞く聲はうぐひすのほう法華經の第一の巻
鶯のひとこゑきけば初春のねうちさだまる千金衣鳥

上元の夜雪はれ月きよし

正月も半分くひしもちづきの臘豆腐にゆきの小松菜

若菜

春日野のとぶ火のどもり出てみよい、幾日ありてわゝ若菜つまん

梅

しら雪にまがひてさける梅なれば花のかたちも犬のあし跡
同勢の桃もさくらもつゞくべし一番やりの梅のさきがけ
本所の梅をみて

かつしかの勝山嶋田ふり袖のふるうめ屋敷新梅やしき
新梅屋敷にて

和仁きしがもて來し梅のはなゝれば世上の春やひとのみにせん
柳

抱ついで見れどたはひはなかりけり庭の柳のほそき腰もと
初午祭

野狐のしり尾の玉にけおされてたぬきのきんもちとむ初むま
春雨

春雨のほそきうみそにくらぶればふしだらけなる青柳のいと

春霞

はるかすみ立きたびれて武蔵のゝはら一ばいにのばす日の足

春曙

一刻を千金づくにつもりなば六萬兩の春のあけぼの

江春曙

あけぼのは大江の千里春のよのおぼろ月夜にしくものぞなき

春の野にて

きのふこそすてゝんくくと嘆せしがべんく草となりけるかな

花

盪させ米をくはせて花までもみよと造化のいかい御造作

山花盛

風のいるすきまもあらぬ山櫻さくらが山かやまがさくらか

上野花

この春は八重に一重をこきまぜていやが上野の花ざかりかな

一面の花は碁盤の上野山くろ門前にかゝるしら雲

吉原花

よし原に夜みせをはるの夕ぐれは入相のかねに花やさくらん

これはたが下屋敷かとみるまでに植しさくらはなのよし原

感應寺花

入相のかねこゝろせよ感應寺はなのあたりに富はつくとも

彌生七日牛天神の花をみて

天神の乗るてふ牛はねがひからはなづら通す花をみるかな

、 瘡守稻荷の前に垂絲櫻あり

ひもろぎの團子のくしをさしかさせしだり櫻の花のさかもり

彌生九日御殿山の花をみて

うれしさをつゝむにあまる袖の岡花のさかりもそろふゆきたけ

墨田川に花を見て

遠のりの駒二三疋すみだ川つかれたりとも花につなぐな

小金井の花をさかりなりときゝて見にゆかまほしと

思へど道のほど遠しときゝてとまりぬ借よめる

花よりもまづ駕籠賃ぞをしまるゝわづか一步のこかね井の道

花發多風雨

世中はせん氣に頭痛あめにかぜ花見の暮をはるぞすくなき

護國寺にて花のちるをみて

入相のかねはならねど山寺のはなは寂滅爲樂とぞなる

山寺にちりしく花の小紋がた注文通り入相のかね

惜花

さく花のかへる根つけの琥珀にもなりて木かけの塵をすはゞや

三月三日

盃をさすが女の節句とてもよのあたりに手まづさへきる

曲水宴

さかづきのうかむ趣向にまかせたる狂歌はなんの曲水もなし

沙干

雁がねをかへしもあへず櫻がりしほひがりとてかりくらしけり

雲雀

舞ひばりかこの鳥屋が手におちてねも高くこそ揚りこそすれ

歸雁

幸若の御禮めでたくしまひつゝともに越路へかへるかりかね

呼子鳥

三鳥の傳授のすみしめでたさはおぼつかなくもなき呼子鳥

牡若

かきつばた昔は伊勢の物がたり今はめでたくひらく三河記

菜花

春の野の蝶々とまれなの花のこがねは誰もにくからぬ色

櫻草

みてのみや人にかたらん櫻草ねごとほりてわらづとにせん

ちればこそとは云ものゝちらぬこそいとどめでたき櫻草なれ

苗代

苗代のたねは一粒萬倍にめでたくさんになりはひのみち

山吹

山吹のはながみばかり金いれにみのひとつだになきぞかなしき

玉川山吹

山ぶきの口なし飯やもらんとておたま杓子もゐでの玉川

放屁百首歌の中に

七へ八へ屁をこき井出のやまぶきのみのひとつだに出ぬぞ清けれ

簗市をよめる

七重八重こがねの龍の山ぶきのみのひとつだにうれものこらす

池藤

上からも又したからも花とはなあはせかゞみの池の藤なみ

牡丹

十日づゝ春と夏とに咲わけし花やどちらが色ふかみぐさ

あすよりは花のあたりに匂ひてし三月盡のたきがらもなし
山手初夏

目に青葉耳に鐵砲ほととぎすかつをはいまだ口にはいらす

垣 卯 花

雲ゆきとみえし櫻にならべてもくんでは落ぬ卯花おどし

旅路卯花

たび人も笠ぬぎて見よ花の名の卯のとき雨にぬるゝ垣根を

灌 佛

み佛に産湯かけたる郭公天上天下たつたひとこゑ

待 郭 公

もやくと青葉にくもる夏げしきめくらがみても郭公ぞら

郭 公

郭公なきつる影はみえねどもきいた證據は有明の月
山の手のやまほととぎすをりくは庭の梢にとまりてもなく
いかほどにこらへて見ても郭公なかねばならぬ村雨の空
初更には二三更とゝ四更にき五更にすつと明るしのゝめ

三叉の四季庵にて郭公をきゝて

郭公なくやひとふたみつまたときくたびごとにくら四季庵

卯月の頃かつをすくなければ

かしましい八千八聲なかすとも三千本をたつた一ぼん

葵

いたゞいて肩にかけたる御小袖もめでたき時にあふひ唐草

加 茂 祭

山王や神田とちがひなまぬるい加茂のまつりの車あらそひ
何がしの庭に花たちばなのさかりなるを見侍りしに
もとは禁庭の右のつかさの種なるよしをきゝて

百敷のみはしのもとに立花をやしきのうちに今日みつるかな
五月雨

をりくは時あかりしてからかさをつめば又もひらく五月雨
放屁百首歌の中に瞿麥

けさ見ればいつしか夜屁をひり置いていとどね臭き床夏のはな
蓮

はちす葉はどうやら佛くさけれど花の君子ときけばめでたし
氷室

去年より氣をはりつめし氷室守こよひは心とけくとねん

天王祭

天王の夜宮の光やはらげて御紋の瓜もちりにまじはる
放屁百首歌の中に蚊遣火

賤が家のかやりをふすべくく時はぶくとなくかの寄もつかれず
題しらす

盃にとびこむ蚤ものみ仲間おさへもやらず潰されもせず
質屋蟲干

質ぐらにかけし地赤の蟲干はなかれもあへぬ紅葉なりけり
船夕立

ふねの帆のはらめる方に夕立のくものはやめやふりいだすらん
別荘納涼

時ならずふり來りたるすゞしさはこれ水無月のしも屋敷かも

泉

金銀はいづみのごとく涌きいでよさあらば人にくれてやり水

花 火

おもしろや鶉つかひよりも金つかひこの川浪にばつと花火は

西 瓜

いつはりのなき世なりせば本なれの西瓜のかはに穴はあけまじ

夏 萩

罪とがもあらにぞ拂へにこくと笑ひ清むるけふぞめでたき

立 秋

黄金の桐のひと葉もおめでたくつもればちよの秋やたつらん

風 鈴 告 秋

風鈴のりんとひときし秋風は萩の上はの一文のぜに

七 夕

男たなばためたなばたと祝ふらん天のかはらぬおであひの空
あまの川ながれ渡りのもろかせぎ牛をひこぼしはたを織姫
七夕のおとも香もなき上天のおことを誰かきし出しけん

萩

白川の御關所ならばなが櫃のなかあらためてみやぎのゝ萩

萩寺のはぎを見侍りて

萩寺のあきの夕ぐれきてみれば入江町のかねに露ぞちりける

女 郎 花

女郎花くちもさが野にたつた今遍昭さんが落なさんした

薄

花すゝきほゝゑみたてる秋の野にめでたい事をまねくとぞ見る

蘭

草かうや東の門のお屋敷は花をめでたい人のなる蘭

朝顔

はや起のたねともなれば朝がほの花みるばかりめでたきはなし

盃蘭盆會

掛乞のみる目かぐ鼻うるさくて人に忍ぶのうら盆もがな

盆踊

子はしらぬ親の心のそめゆかた盆まへ胸の踊る思ひを

吉原燈籠

神棚のあかしの上も燈籠の光る源氏をまちあひの辻

相撲

秋の野のにしきのまはしすまひ草所せきわき小むすびの露

雁

大空にかり／＼かりの聲するはたがかき出しやかけてきぬらん

鹿

秋はてばやがて紅葉の吸物となるともしかと知らて鳴らん

神頭鹿

神の威をひけらかすがのめでたさは小鹿の角のつかまへてなし

霧

市をなす門のとびらを朝もよしきり／＼きりと明るめでたさ

月

かくばかりめでたく見ゆる世の中をうらやましくやのぞく月影

十五夜月

分厘のくもさへはれてそろばんの玉の三五の十五夜の月

十六夜

夕ぎりのまよひもいまだ晴やらでいでし藤屋のいざよひの月
浦 月

芝浦の漁人もあみをうちわすれ月にはいとふ鰯雲かな
望の空さだめなければ

千金の名だかき月の雲まよりせめて一二分もれ出よかし
月 前 風

酔さめのこゝろも月の様さきに風のかけたる單物かな
月 前 枝 豆

枝ぶりも柱をとこと豆男いづれ風月才はじけたり
月 前 述 懐

世中はいつも月夜に米のめしさて又まうし金のほしさよ

清がきもあがる二度目の月かけはまた一段とみことなりけり

十三夜唐衣橋洲のもとにて謠十三番を題にて月の歌
よみけるとき田村を

あれをみよふしぎやなびく大空にひとたび放つちよの月影
十三夜雨ふり出ければ

十三夜あめはふりきぬ里いもの衣かつきてぞすべかりける
擗 衣

遠國の便もゆかしさよぎぬためてたく歸る衣うつなり
鴉

一つとりふたつとりては焼てくふ鶉なくなるふかくさの里
菊

昔から花をめでたい人の名はこれぞ息さい延命ときく

酒をのむ陶淵明がものづきにかなふさかなの御料理菊
水よりの巢鴨の里のたそがれに羽白の菊のいろぞまがはぬ
七百の慈童もありときくの花高野六十那智はものかは

翫 菊

大菊をめづる狂歌ははながみの小さくを折てかくも耻かし

茸 狩

秋の田のかりほの庵の歌がるた手もとにありてしれぬ茸狩

蟲

秋の野のちぐさはやんもしら露のふつて出たるすゝ蟲の聲
あきの野のながきにはらの淋しさは只ぐうくと蟲の音ぞする

放屁百首歌の中に

おはしたの龍田が屁をもみぢばのうすくこくへにさらす赤はぢ

紅 葉

たつた山こぞのしをりは林間に酒あたゝめて知れぬもみぢば

柿

子を思ふ朝三暮四の猿のしり眞赤に一つのこるえだ柿

初 霜

はつ霜と何思ひけんかしらにはみそとせあまり先ふりしを

九 月 盡

紅葉ちる萩やすゝきの本舞臺まづ今日はこれぎりの秋
今日ぎりに吾あきはてし貧乏の神なし月を待ぞめでたき

時 雨

かみぐの留守をあつかふ月なれば馬鹿正直にしぐれふるなり
梢まで坊主にせんと月代をひともみもんで時雨ふるなり

思ふ事かなへつく／＼なかむれば時雨のそらにふる小ぬか雨
めでた百首歌の中に

世中は時雨のやどり宗祇でもめでたい事のふり來れかし

落葉

掃除せぬ門のおちばをふみつけてこそ／＼こそと誰かとはまし

橋上霜

世中は我よりさきに用のある人のあし跡はしの上の霜

小春

朝飯と晝げのあひだ短かくてはらも小春の空の長閑さ

神無月の歌

神無月出雲の神のよりあひに仲人口をきこしめせと申す

霜月初子を

霜月の初子のけふの玉はゞき取りてはき出す貧乏の神

雪

駒とめて袖うち拂ふ世話もなし坊主合羽の雪の夕ぐれ
雪ふれば炬燵やぐらに立籠りうつて出づべきいきほひもなし
一むれの奥女中かとみるまでに木毎に花のわた帽子雪
よし人はいぬといふともふる雪に足跡つけて出んとぞ思ふ

雪ふりければ

香爐峰の雪はと問はゞ置炬燵ふとんかゞげて見るばかりなり

霜月十五日雪ふるこれ四度目なり

ふる雪は一二度ならず三度四度またいつかはと待ぞくるしき

水仙

白かねの臺にこがねの盞の花はいはずと人やするせん

氷

足もとの明らけき世のめでたさはうすき氷をふまぬ世渡り

千鳥

空と海ひつたり月の中川のばら／＼松にたつ千鳥かな

酉の市

さん水にひよみの酉の市ながら芋ほり僧都なきにしもあらず

顔見世

顔見世のしら／＼明ぞめでたけれ頭にしもの翁わたして

神樂

神樂笛ひやらやらんらめでたいこ打や天しやう天神の前

炭竈

朝夕の烟はかくと角大のしるしもしるき熊野炭竈

浅草市

浅草の市にひかれてあづさ弓矢大臣門いづるひとむれ
あさくさの裏白根松やぶ柑子だい／＼ところほん田原町
浅草の市のはとりしめ縄を荒神棚にかけろとやなく

節分

齒がないとことはいへど一つかみ鬼打豆をくれて行とし

歳暮

行年をしめゆふうちにくる春をまつや／＼の聲ぞきこゆる
いま更に何かをしまん神武より二千年來くれてゆくとし
年浪の今やこえんとかど／＼にたてし師走の末のまつ山
此者は花の春へとまゐり候お通しなされ年の關守
願はくば通り手形をうち忘れ跡へ歸らんとしの御關所

除夜

金はあり掛もはらうて置炬燵そろく寝いりつかん年の夜
味喰こしのそこにたまれる大晦日こすに越されずこされずこす

富士山

みづうみの出来し近江の御届の二三日過てふじの注進
おふじさん霞の帯をときなんし雪のはだへが見たうござんす

姨捨山

更科やうばを捨てたる山あればひろふ神あり月よみのみこ

峠

山の神さつた峠の風景は三くだり半にかきもつくさじ

武蔵野

花すゝきほうき千里の武蔵野は招かずとても民のとどまる

隅田川

隅田川いまは吾妻の都鳥業平などはさいこ中將
阿保親王第五ばん目のむすこ株すみ田川原をひとりぶらつく

關

あいた口戸さゝぬ御代のためでたさをお譽め申すもはゞかりの關

山家

世を捨て山にいたるとも味喰醬油酒の通ひ路なくてかなはじ

放屁百首歌の中に

山里にしりこみしつゝ入しより浮世の事は屁とも思はず

山城の名所の歌こひける人に

山城のこはだの里の馬かしは君を思はぬ人が得意場

函谷關

雞のよひなきも程すぎしころ棒ちぎり木でせきに關守

赤壁

文月のふみやも通ふ神無月うらをかへして遊ぶ赤壁

小野小町

とめられてつひ居續けもことはりや引四つすぎの雨乞小町

喜撰法師

我庵はみやこの茶つみ午ひつじさる酉いぬ亥うしとら宇治

女三の宮

柏木のかし棹でひく三味線は女三の糸にから猫の皮

待宵侍従

色客のくるかくと待よひのよそにふけゆく引よつのかね

伏柴加賀

胸先にこるばかりなるなげきして衣引かつぎふし柴の加賀

唐堯

おふたりの娘にひとり掣養子土階三尺小ぬか三合

老子

桃栗は三年柿は八年の中にすもゝは八十とせのはる

莊子

莊周も猫に追はれてうなされん蝴蝶となりし春の日のゆめ

列子

追風にのりゆく時は道中のくもの足より早き駕籠かき

伯夷

蕨ばかりくふとはいかい不自由な焼豆腐でも周のまめかは

伯牙

鐘子期にわかれし時のおくやみは琴をかついで山やすぎけん

陶淵明

世のうきを柳にやらでませ垣の菊と等しくかへんなんいさ

孔明

孔明が羽根の扇も綸巾もどこやら似たる菊水の紋

褒似

おめかけの屋形で風をきる頃は舟のほゝゑむ花火見物

揚貴妃

空だきの沈香亭の全盛もあはれ馬嵬が原のひとつ尻

吉野山の繪に

むかしたれかゝる狂歌の種をまきてよしのゝ花もちりになしけん

隣松がかける鯉の繪に

繪にかける隣の松の魚をみてたゞいたづらに舌をうごかす

三夕の繪に

折からの鳴焼もなく眞木もなしうらやせとやの秋の夕ぐれ

扇がけの賛

丈山も白扇ならで富士山をさかさにかくる床柱かな

竹に雀のかたかけるに

とまるべき雀いろにやなりぬらん夕ぐれ竹のふしどもとめて

文武火茶釜の繪に

文武火の茶釜に毛さへはへたるは上手のてから水がもりん寺

六歌仙の繪に

歌よみのむぐさの中に女郎花男やまにもまさる一もと

小町と業平の繪に

四歌仙の小便にたつそのあとは何かひそく小町業平
雨乞小町の繪に

さりとはまたことわりも云にくし小野の小町が雨の御無心
蟬丸の繪に

あふ坂の山はたくぼく流泉を關の清水ときくや蟬丸
定家卿月をみる繪に

十五夜にかたぶく月の歌よみはあかつきのかね權中納言
清少納言の繪に

清といふ名代の娘まくら繪のわらひ本よむはるの明仄
紫式部の繪に

紫式部ながめながらに氣づかふは雲の根となる石山の月
渡邊綱の繪に

上がたの鬼どのいかが渡邊のつなはむさしの箕田の江戸ツ子
西行法師銀の猫もてる繪に

此猫は何久ほどであらうとはかけてもいはぬ圓位上人
頼朝伏木かくれの繪に

七人の中にひとりの大あたまふし木の内にかくれかねつゝ
辨慶の繪に

西塔の武藏坊辨慶と申すもの請人もなく人主もなし
七賢人の繪に

竹林はやぶ蚊の多き所ともしらでうかゝあそぶ生酔
韓信うしろより股をくゞる繪に

韓信も樊噲ならばうしろからいるべきものを肛門の會
孟宗の繪に

末の世となりゆくふりの孝行も孟宗竹や安くこそなれ

浦島太郎の繪に

三千とせになるてふ桃の太郎殿鬼が島からかへり花さく

花咲爺の繪に

むかしたれないかないかきの灰をまきて枯木の枝に花咲せけん

富士に雪ふる繪に

ふりつゝの手に葉を見せて咲耶姫白粉こぼす雪の明ぼの

向嶋の繪に

武藏屋を出てまつちやくと挑灯ふりしむかしこひしき

龍田川の繪に

龍田川もみちば流るめりくとわたらば錦横さけやせん

猿曳の繪に

木のみをば猿にくはせてこの身をばさるにまかせてもらふ猿曳
猿曳の百一升の米と錢あしたに四軒くれに三軒

馬かたの繪に

鹿をおふ獵師はみねど足引の山をみておふ馬かたの鞭

傾城の繪に

白妙の藤伊は雪のふじの根をはりぬきにせし夕ぎりの文

妓女のふみ見るかたかけるに

一二度の客に無心はおしろいの面のかはのあついたの帯

出女の化粧するかたかけるに

顔べにの赤坂ちかき黒髪の油しみたる御油の出女

船人の繪に

安國とおたひらにめせ君は船匠は水なり川のおもかぢ

大津繪の賛

三六

むかし娘ありけり伊達にふり袖の藤のしなひの三尺あまり
双六のひとつあまれば大津繪の四十八鷹五十三次
蛭子の繪に

つりあげしあかめを横に抱しめていつも心の若えびすかな
大黒の繪に

鬼はそと福はうちでの小槌もて數の寶をまかきやらの神
布袋味噌をする繪に

味噌すりてまたんお客のくるまでは五十六億七千萬歳
寶船の繪に

ながら夜のとはのねむふの皆目ざめ辨天さまの小べん所
拂子の繪に

はらふべき塵もなければ一本の柱にかけておかんと拂子

玉の繪に

十和氏がほり出したる連城のたまは代金十五枚かも

破魔弓の繪に

高砂の尉と姥とは一對のゆみのつるかめ松と竹の矢

生姜と蕃椒とをかきし繪に

はじかみを捨すにくひし聖人もとうがらしをば喰やくはずや

述懐

いたづらに過る月日も面白し花みてばかり暮されぬ世は
世の中はさても世話しや酒の爛ちろりの袴きたりぬいだり
ねてまでどくらせど更に何こともなきこそ人の果報なりけれ
日の鼠月の兎のかはごろもきてかへるべき山里もがな

三七

西上人のひとにはくすの松原といへる言のはの裏をかへして

世中には時の狂歌師とよばるゝ名こそをかしかりけれ
六十になりけるとし

したがふかしたがはぬかはしらねどもまづ是迄の耳たぶにこそ
老女懐舊

川水のながれて年をふるばゝのむかしくの嘶せんたく
題しらす

さむけさもいとほぬみのわ金杉の妹がりゆきしむかしこひしき
文寶亭が上毛下毛の國へゆくを送る

我もむかし黒髪山にのぼりしが今はかしらのしもつけの國
かみつけの伊香保の沼のいかいことおつれもあれば面白い旅

卯月の頃平秩東作が旅立ける時梅櫻まつのを
おくるとて

最長寺ときならぬ雪の鉢の木を瘦たるむまのはなむけと見よ
旅宿

朝もよし木質どまりの出立は心のこんのともしびもなし
馬喰町旅宿

夢むすぶ淺草まくら柳こり花のお江戸に旅寝せしかな
六十になりけるとしのくれ武藏のゝほとりに
旅寝して

我としも六十餘國むさしのゝ八百里ほどいきんとぞおもふ
さつき十一日裏住身まかりぬと聞て

長櫃と思ひしものを重箱のおはぎとなりぬ秋のこぬまに

節松の嫁睦月九日みまかりぬときよて
ふし松のかゝさまことしゆかれけりさぞや待らんあけら管江

少々道頼なくなりぬときよて

せうくの道よりなればよけれども十萬億土さつてかへらす
思ひきや芝居がへりの道よりか香花の屋にならんものとは
道頼が宅は乗物町にぞありける

落栗庵元の空網水無月廿八日に身まかりしときよて
水神の森の下露はらくと秋をもまたぬおちぐりのおと

大根太木が一周忌に寄柏餅懐舊といふことを
ひとくと共によみ侍りけるに

ひき碓のひとまはりにも成にけり過しむかしのなつかしは餅
文月十八日唐衣橋洲大人十三回忌に

昔みし人はもぬけのからころもきつ十三の年やたちけん

釋 教

西東まゐるひとく御中にひらくおふみの御報恩講

放屁百首歌の中に

おろかなる人は佛とも放屁ともしらではかなき世をや屁ひらん

不飲酒戒

腸をくだす薬ぞせんじやう常のごとくの生姜酒でも

善光寺奉納

なには江のあしとて捨しみ佛もいまは本田のよしみつの寺

三圍稻荷奉納に夏神祇

みめぐりの早苗とり居の乙女子がかさぎぞ夏のしるし也ける

秋 神 祇

幾秋かかけていのらん神がきの紅葉のにしき月のしらゆふ
武藏國目黒大鳥明神にて

此神にぬさをも鳥の名にしおはゞさぞ大きなるかごありぬべし
半田 稻荷

いなりやま命婦の裳瘡赤もがさかへす袂もかろき神かぜ
戸隠神社奉納

この神は浦嶋が子の箱ならで天の岩戸をあけてうれしき
和歌 三神

立かへりみつの御神ほのくくと明石の浦や和歌の浦浪
祝のこゝろを

鶴もいや龜もいや松竹もいやたゞの人にて死ぬぞめでたき
寄 龜 祝

萬年の龜からみれば千年のつるも十羽を一からげなり

寄 鶴 祝

千ねんもくきてきれざるは徳用向の鶴の毛衣
めでた百首歌の中に無常を

世の中の諸行無常をやめにして是生滅法界のめでたさ

髪 置

今年よりつむりにけしを置そめて千代よろづ代の数とりにせん
浅草庵の剃髪を祝ひて

あらためて浅草のりの道にいるひがし仲町もとの市人

祝 の 歌

帚たて草履に灸はすゑるとも千秋萬歳われは長尻
文政六年の春元旦によめる

生すぎて七十五年喰ひつぶし限りしられぬ天地の恩

隨筆「奴師勞之」の卷末に

ながらへば寅卯辰巳やしのばれむうしとみし年今はこひしき

蜀山狂歌撰集 奥付
定價金貳拾錢 送料三錢

昭和十二年八月十一日印刷
昭和十二年八月十五日發行

編者 遺詠叢書刊行會

發行者 小山一郎

東京市中野區大和町三一六

印刷者 中橋昌吉

東京市小石川區戸崎町九六

發行所 あをぞら會出版部

東京市中野區大和町三一六

振替東京三三、〇七番

發賣元 東京パンフレット社

東京市中野區大和町三一六

特約店

鐵道各驛ホームスタンド一手
販賣東京鐵道局公認 鐵道保
養會・鐵道弘濟會
森田書房(東京)新正堂(大阪)

終